
不幸女・すいーつバイキング。シリーズ

黒淵 めかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸女・すいーつバイキング。シリーズ

【Nコード】

N8507P

【作者名】

黒淵 めかね

【あらすじ】

様々な平凡女が、ただただ普通に生きていただけなのに、麗しき狂った美形から好かれる、一話完結の短編集です。

まどねーぬ。(前書き)

長いです。

そして、最初にひと言、ごめんなさいっ

記念すべき第一弾はく転生平凡侍女×敬語ヤンデレ王子様くです

1月16日 改稿しました。

まどれーぬ。

普通に考えて。

数ある人間の中で、自分だけが選ばれて異世界に転生させられた、なんてことが起きたら。

<自分には何か使命があるのだろう>とか考えるのが一般的であり。年頃の乙女ならば王子様や、騎士様、はたまた魔王様だのその側近だの、とりあえず壮絶な美形に気に入られまくって最終的に逆ハーマでもてどうしましょーっ、な展開を知らず知らずに胸を高まらせ望んでしまうものであると断言する。

むしろ自分がそうだった。

しかし、現実はそう甘くない。

平凡な自分の周りには同じような平凡顔ばかりしか集まらなかった。

甘く優美な夢を抱いていた分ガツカリ感はある程度あったが、それでもすごく気を許せる仲の良い友人や大切な第二の家族に囲まれてそれなりに幸せな人生が歩めていたので「ま、いっか」と、満足していた。

…そう、だから。

「…貴方は私と結婚するんですよ。…嬉しいでしょう?」

こんな展開いまさらないのです、王子様。

* * *

城の中では下っ端だが侍女よりも一応位が高い太った貴族の無差別なセクハラに、新人の侍女を庇いながら笑顔で対応し必死に耐えたわたしの名前はメア・スーチェン。

日常といえば日常を今日も元気に過ごしていたはずなのに、何故わたしは現在――……

「いやあー、昼休み前なのにゴメンねー? メアちゃん」

「……いえ」(顔面蒼白引きつり気味)

――王子直属の側近である、アーチェスト・リッガー様に横抱きされているんでしょうね?!

しかも、城の者で溢れている廊下の中で?!

……っ て、ちよつと待つてそんな「あらー？アーチェスト様の彼女
かしらあっ」的な興味津々な目で見ないで下さい皆様方あああああ
こんな平凡女と妖艶麗美な騎士様が釣り合つわけないですからああ
ああああ

「（はっそうだ！）…アーチェスト様」

「んー？ 何かなー？」

「（はうっ そんな鼻血ものの笑顔を至近距離で向けないでえええ）
…っあの、降ろして下さい。自分で歩きますからあっ」

「ゴメンねえ、それは出来ないんだ。王太子様直々の命だからねー」

えっ、この羞恥プレイが？！

ええええええええっ、わたし王太子様に関つたことすらないんです
けどっ

「まあ、キミもこのほうが楽でいいでしょ？」

身体はねっ！

わたしのガラスのハートは壊れか、……っ 壊れましたあああ！ ハ
イ今嫉妬に塗れた貴族のお姫様の殺気だった目と目が合っちゃって
ブロークンしましたああああああ

あああ、どうしよ顔を覚えられるううううううっ

顔をコレ以上記憶されまいとアーチェストの首元に埋めて、ひいいいっと、青ざめながらこの世界の家族に、

——ああああ、ごめんなさいパピー、マミー、それからジョニー
(犬)っ！

我が家は権力によって潰されるかもですうううううう
ううう

と、内心絶叫していたメアは聞いていなかった。

「……っ、可愛い。アイツが要らなくなったらボクが貰おうかな」

アーチェストの思わず呟いてしまったこの言葉を。

* * *

ガヤガヤ賑わう廊下をゆつくりと、アーチェスト様に横抱きされながら運ばれていったわたし。

途中、憎悪だの嫉妬だのと物騒な殺気と、人々の好奇心に晒されて、ああもう旅立ちたいなうふふふ…と、意識が飛びかけていたわたしだったが、ふと気がつく。

——そういえば、どこに連れていかれてるんだ、わたし……？

思わずはっ、と伏せていた顔を上げる。　　ってああ目の前に凄まじい美顔がっ…が、ガンバレわたし！

「あ、ああああのっ」

「んー？」

ひぎゃああああちよっ、まっ、太股触られてるうっうっ？！

い、いや気のせいですが、気のせいですよメア・スーチェン…っ！

美貌の塊であるアーチェスト様がこんな平凡女に手を出すほど女に困ってる訳がないでしょっ

「ふ、んっ…あ…っ」

「（やばいなー、これ）」

「っ……えっとで、すねっ…んっ……い、ったいドコにっ、行ってるんっ、です、か…っ（ひいーっ手つきがエロいよおおおおっ）」

「

「（くくっ、本気で欲しくなってきたよ）大丈夫。もうすぐ着くよ」

大丈夫じゃーなあいいいいつつ…っ、あれ？　そういえば、周りに人がいない…ってココ

「……お城の、大聖堂の近く……？」

鏡の様に顔が映るほど磨かれた白い大理石。

余すところなく金や銀、鮮やかな真紅の宝石で修飾された壮大な壁や柱。

王族や家臣などの身分が高い人々の中でも選ばれた一握りの人間しか入れない大聖堂近くの廊下を、いつの間にかアーチェスト様に横抱きにされて、歩かれていたのだ。

「えっ？……え……？」

「さあ、入るよー。メアちゃん、ちよつとお口にチャックねー」

ぶはっ、ちよっ、…美形に子供扱いされたああああ、つて、え、っ？！

開きっぱなしの大聖堂の大きな入り口をアーチェスト様が、わたしを抱きかかえたまま、迷い無く入っていく。

王と家臣との重要な会議にも使われる広大な輝かしいその空間には、なにやら王座の周りに30人ほどの人々が集まっている。服装を見る限り絶対上権力者だろう。

え？、え？なんですかわたしはただの侍女ですよおおおっ？（しかも下っ端）

得体のしれないあまりの恐怖に体を強張らせ、自分をガッチリとホールドしながら、足音もたてずゆっくりと、その王座に近づくアーチェスト様を縫るように見上げるが、ニッコリと無言の圧力で押さえつけられる。

「——っですから、貴方様のためにも、巫女姫・マミ様とのご結婚を了承して下さいませっっルーファス様——」

「そうですっ！ 我ら一同はもとい、全国民も貴方と巫女姫様のご結婚を望んでおりますっ！」

「巫女姫様は魔力もそのお優しきご性格も容姿も大変優れているお方！ルーファス様もご不満などありませんまいっっ？！」

近づくにつれてどんどん大きくなる怒号のような懇願する叫びに、ますます身を竦ませる。

ひいひいひいっ いったい何事なんですかあああああつっ

ちよいちよい出てくるルーファス様って、やっぱり王子様のことですよねええええっっ？！

って、ああああもう王座周り集団（勝手に命名）のすぐ後ろにっ
いちゃったよおーっっ

どうなるんだろっ、わたし

おかしな方向に意識が飛びかけていると、近くにいた、アーチェスト様の幼馴染らしい王国騎士団団長のハルム・ウィッグ様がアーチェスト様に気がついたらしい。

一瞬遅れてきたことを咎めるようにその麗しいお顔を歪め、眉をよせて、何かを言おうと口を開きかけるが、その腕の中に居る明らかにこの場に不釣り合いなわたしの姿を見つけ、その綺麗なアイスブル
ーの瞳が驚愕し見開く。

そのまま完全に固まってしまったハルム様を見て、アーチェスト様

はますます笑みを深め、わたしは「ですよねー完全に浮いてますもんねーでっすよねー」と虚ろ眼になっていた。

「……静かに」

あれだけ休む暇なく次々と出てくる重臣からの叫びがピタリと止み、心地よい美声が大聖堂に鳴り響く。

短いながらも有無を言わせないその声色に、意識が引き戻され思わず息が止まる。

視線をその声の方向に向けると人々の隙間から、王座に背を向け、家臣と対面するように堂々と立っている麗人が見えた。

女性的な妖艶な色香を放つ、洗練された長身の引き締まった白い肢体。

その張りのある真っ白な肌と対照的な黒い衣服に身を包み、艶のある長い黒髪を首の左側に流すように白のリボンで束ねている、我が国が誇る跡継ぎであるルーファス様。

その整えられた極上のお顔に、鍛えられた体躯。王太子でありながら、他国にも「賢王の中の賢王になられるだろう」と、すでに噂されているほどの聡明さと、文句ない権力。

日々貴族のお姫様は彼に抱かれないと、水面下で毒々しい醜い争いを繰り広げているという。

しかし、その争いが最近大人しくなってきたらしい。

その理由は、「我関せず」な態度をとっている現・王の王座の下部分に控え、一心にルーファス様を見つめている、異世界から召喚された姫巫女・マミ様。

おそらくわたしの生きていた前の世界の現代から、伝統ゆえに召喚されたナイスバディーな、思わず守ってしまいたくなる癒し系美少女だ。

その美貌は凄まじいほどにルーファス様に執着していた貴族のお姫様たちを、短い期間で消沈させるほど光り輝いており、ルーファス様ほどではないが、秀才で、下々の者にも優しいらしい。

魔術の扱いにも長けている彼女は、本来、滞在期間が過ぎたら元の世界に帰されるところを多くの家臣に惜しまれて、又、彼女自身がルーファス様を慕っていたことから、二つ返事でこの世界に残ることを決心したらしい。

……馬鹿じゃないだろうか。

そこまで考えていきなり思考が冷めてくる。

——あつちに残してきた人たちは恋愛感情でそう簡単に捨てられるほど、軽い存在じゃないのに。わたしには、そんな選択権もなかつ

たのに。

…あれ、……？ やだな。

ドロドロと黒いものが胸のうちに流れてくる。

そんなとき。

「…確かに彼女に欠点などない……」

再び凜とした美声が鳴り響き、思考が打ち碎かれる。

ソロソロと顔を上げ、視線をルーファス様に合わせると、その黒真珠のような美しい瞳がわたしを見つめていた。

え？ と首を傾げると、何故だかその瞳が不機嫌そうに細まり、アーチエスト様が一瞬ブルリと体を震わせた。

突然身震いをしたアーチエスト様を見上げると彼はいまだにニコニコと微笑みながら冷や汗をかいている。

彼をみてハルム様が小さく「後で骨は拾いますよ」とはき捨てるように言い放つ。

「（ふええっ）ア、アーチェスト様っやっぱりわたしごときがこの場所に来てはいけないのではっ？」

再び訪れた大きな不安の波に半泣きになりながらアーチェスト様を見上げて小声で縋る。

早くわたしを解放してえええええっ、と思いを込めて見つめるが、肝心のアーチェスト様は何故か顔を赤くしたかと思うと、もう一度、ビクンっとさつきよりも大きく体を跳ねさせ、カタカタと小刻みに痙攣するように震えはじめた。顔色はもはや青黒い。

そんなアーチェスト様をみて「…骨すら残らないかもしれませんね」と引きつり顔で呟くハルム様。

「だ、大丈夫ですかっ」（小声）

「……大丈夫だよ。あと、キミがいないとこの国滅亡しちゃうから安心してこの場についてね」

ひいつ滅亡?!

突然出てきた物騒な言葉に身を竦ませる。

「…ぐっ……メアちゃん。王子のほう向いてくれる?」

頭の中が混乱で真っ白になるながら、アーチェスト様の言う通りにルーファス様のほうに視線を戻す。

そして、また身をビクッと竦ませる。

—— な、なんでコッチを見てるの…？

黒真珠の瞳が、変わらずにコチヲを見据えていたからだ。

わたしの混乱をよそに黒の王太子は言葉を再び紡ぐ。

「…そう。この度、我が国に召喚された姫巫女は過去最高といつても過言ではないでしょう。あらゆる全てに優れている。我が国にとつて恵沢しかもたらさないでしょうね」

「…っならば！」

「ならば、なんです？ …—— 私に、愛してもいない女性と生を共にする趣味はありません」

「……え、？」

何処となく期待するようにルーファス様を見つめていた姫巫女の大きな瞳が驚愕に見開かれる。

「貴方は、私よりもお似合いの男性と一緒になった方が幸せになれるでしょう」

「…っ、まって！ マミはルーファス様の為にこの世界に残ったんだよっ？！」

姫巫女が鈴を鳴らしたような可憐な声で、絶えるように悲痛に叫ぶ。

「そうですか」

「そ、…うですか…？…それ、…だけ…？」

ルーファス様の返答に、姫巫女がみるみる絶望に染まり…――

「おや…？ 私がいつく残れ…なんて頼みましたか？」

「……………え…」

――力なくその華奢な身体が崩れ落ちた。

ザワザワと家臣が青ざめ慌て始めるが、誰も彼女に近づかない。

そして、今まで傍観に徹していた老いてもなお、はっ、とするようなオーラと美貌を持つ貫禄溢れる王が言葉を発する。

「……………では、姫巫女との婚約は白紙に戻そう」

その言葉に家臣は口を噤みさらに青ざめ、ルーファス様は艶やかな笑みを浮かべる。

チラリとアーチェスト様とハルム様を見ると、二人とも顔を歪め「欲に溺れた馬鹿共め」だの「これから彼女をどうするつもりなんでしょうね。あの容姿なら高く売れるでしょうが」などと、物騒なことを呟いていた。

と、いうか……あのママっていう巫女姫って本当に頭いいのかな？なんか話し方がアホっぽいような…

そして、王の言葉は続く。

「…しかし、これ以上我は待てない。……相手が巫女姫じゃないだけで、どちらにせよ結婚はしてもらおう」

「ええ。かまいませんよ」

ほう？と王の深い皺が刻まれた顔の眉が片方わずかに上がる。

「……なんだ、相手がすでにいたのか。…何故ソレを早く言わない？」

——ソワリ…っ！

突然、得体の知れない恐怖と冷気が背筋を走り、頭の中で警報がなり始める。

——な、に？……いやだ、

ニゲロ

イマスグ、ニゲナイト

「ふふっ…言い出せる状況じゃなかったの。…それに、彼女は謙虚でしてね。どなたかと違って身分なんてくだらないものを気にしてまして」

そして、すっ、と今まで王に向けていた顔をコチラに戻し再び私を見据えるルーファス様。

ニゲロ、ニゲロ、逃げロッ

先程よりも強く頭にガンガンと警報が響く。

アーチェスト様の腕の中で暴れてでもこの場から離れたいと思っっているのに、何故か体が冷えていくだけで金縛りをされたように動けない。

コッ…

アーチェスト様が、<ワザと、> 足音を立てて一歩踏み出す。

硬直していた家臣らがコチヲを振り向き、アーチエスト様に道を譲り二つに分かれていく。…腕の中にいるわたしに痛いほど視線を注ぎながら。

コッ……コッ……

視界の中の全てがいきなり緩やかに動き出す。

逃げ　ロ、ニゲろ、ニゲないト

ガンガン鳴り響く警報を聞きながら、呆然とした気持ちでゆっくり遠ざかっていくハルム様の顔を見る。

——　な、んで…？

コッ……コッ……コッ……コッ……

——　なんで……

ほんの数秒が何時間にも感じる。

道をあげながらザワザワと口を動かしているハズの重臣の声が聞こえない。

——なんで……ハルム様は、…

コッ……コッ……コッ……コッ……コッン。

足音が止まる。

そして、目の前には…

麗しい笑みをさらに深め、嬉しそうにわたしに向かって、その白く引き締まった両手を差し出してくるルーファス様。

——わたしを…哀れみの目で見てきたの………？

ニゲロ、 にゲロ 、逃げ 口、 ……逃げろおおおおっ
！！

——逃げ、なくちゃ…？

ぐいっ！っと、体がアーチェス様の腕からルーファス様の腕の中に

移され、時間の流れが元に戻る。

そして、横抱きから、そつ、と降ろされ久しぶりに地に足をつけた感動に浸る暇もなく、ルーフアス様に正面から息もできないほど強く抱きしめられる。

まるで、逃がさないと言っても言う様に後頭部を右手で押さえつけながら。

「……ほう。…お前にしては有り得ないほどの執着ぶりだな……」

抱きしめられたとたんに大きくなった家臣達のざわめきの中でも、後ろから届く王様の声。

視界はルーフアス様の胸元に押さえつけられているせいで真っ暗闇しか見えない。

「ふふつ、…唯一の愛おしい存在ですから」

頭上から大きくルーフアス様の声と彼の息使いと心臓の音が生々しく聞こえる。

相変わらず金縛りのように動けない体と冷えていく体温。

恐らく彼が手を離せば、先程の巫女姫様と同じく自分は床に崩れ落ちるだろう。

「はあ……しか——「っしかしっ!」……」

「……なんでしょう？」

ため息をつき何かを話そうとした王の言葉を恐れ多くも遮る家臣の声。

少しばかり不快に思ったのか、王と話していたときよりも冷えた声が頭上から聞こえ、思わず身をピクンツと、強張らせる。

すると、その振動が伝わったのか後頭部を押さえつけていた手が氣遣うように頭を撫で、さらに頭上から小さく、

「大丈夫ですよ」

と、さっきの冷えた声色とは似つかない安心させるような優しい声で囁かれるが、体は強張ったままだ。

——なにが、…起こってるの……？…

いまなお冷えていく体に震えが止まらない。

「……っ恐れながら！ その女性は侍女でしょう？！ いずれは王となりこの地を治める貴方には相応しくありませんっ！！」

再び誰かの叫びが聞こえ、一人が決意したように言い出すと他にも次々と誰かが叫びだす。

「そうですっ！ 目をお覚まし下さいませっっ！」

「気に入ったのなら妾にすれば宜しいでしょうっ?!」

「――っ 我らが王太子様に色目使いやがって…っ この醜女があつっ
!」

突然現れた侍女を愛おしそうに抱きしめながら、顔色一つ変えずに家臣の訴える声を聞き流す、黒の王太子に焦ったのか、叫びの矛先を一人の家臣がメアに向ける。

「っあの馬鹿」とアーチエスト様の声が近くで聞こえたかと思うと、次の瞬間には、

（――っ ドゴオオオオオオオオっ!!）

凄まじい轟音が大聖堂を包み、床が震え始めた。

冷えすぎて麻痺したような体で、必死に周りの音を拾う。

（――ガッ ツシャアアアアアンツ!!）

「ひっ…っ ひiiiiiiiiiiiiiiiiっ」

「ぎゃあああああああああああああ」

断末魔の叫びのような絶叫と、ガラスが弾ける音と、地鳴りが、大聖堂に残響とともに鳴り響く。

抱き締められている力が、さらにギュツと強くなり、まともに息が出来ず声にならない叫びを上げる。

—— 苦しい……く、るしい……よ……っ……

「……っ 落ち着くんだルーファスっ！」

「—— ルーファス。……腕の中の少女が死に掛けているぞ」

—— ……ふっ、………あ……

体の力が全部抜け、意識が飛ぶ直前。

アーチエスト様の焦り声と、王様の咎めるような静かな声が聞こえた。

* * *

「……ん…っ」

——あたたかい

働かない頭をそのままにゆっくりと目蓋を開け、にじむ視界でそのままぼんやりする。

「——…おや、目覚めましたか。メア」

「…っ?!」

頭上から聞こえてきた聞き覚えのある声が聞こえ、一気に思考が覚める。

バっ、と温まり動くようになった体を動かし、声の方向を見上げると、すぐそこに穏やかに微笑むルーファス様の御顔が……

「——っ!」

思わず離れようとするがガッチリとルーファス様の両腕に抱きこま

れる。

「ああ……離れないほうが良いですよ。…まあ、私としては嬉しいですが」

「…え……？」

幾分か落ち着いた頭で状況を確認しようと辺りを見回す。

どうやら、今わたしがいるのは、侍女ごときの身分では一生体験できないようなフカフカのベッドの中らし、……っっ？！

「な、なんで裸なんですかつ！」

ひぎゃっ、と顔に血を上らせながらシーツを巻きつけ身を隠し、視線をルーファス様から必死にそらす。

そう。何故だか知らないがわたしは勿論、大きなクッションに背を預けているルーファス様も真っ裸だったのだ。

白い女性のようなスベスベの肌と引き締まった腹筋を見てしまった。

「今まで私の胸板に身を預けて一緒に暖を取っていたのですよ？…恥らう貴方も可愛らしいですが」

「なっ、……なんでですかっ？！」

「冷え切っていた貴方の体を暖める為と……夫となる身として、貴方の純潔を確かめただけですよ」

「……え……？」

一気に頭が冷える。

「ふふっ……しかし、良かった。貴方の全ては私のモノですからね」

——この人は、いつ、たい何を、……言っただけ？

「……お、……っと………？」

声が掠れる。

惘然とするわたしの視線を受け、幸せそうに目を細めるルーファス様。

「ええ、そうですよ。……ああ、身分なんて気にしなくてもいいですからね。……貴方は私と結婚するんですよ。……嬉しいでしょう？」

その言葉と同時にわたしを素早く抱き寄せ、右腕は掴みベツトに縫いつけ、左手は恋人のように自分の手と絡ませながら押し倒す。

そして、言葉もなく呆然と状況についていけないわたしに、顔を近づけ微笑む麗人。

「ああ、ああやっとなにに入れましたよ愛しいメア。もう大丈夫です煩い家臣共も、貴方を傷つけるような醜い女共からも守ってあげますからね。ずっと、ずっと此処で過ごしましょうね。この部屋には誰も来させませんし、何でも揃ってますから困ることなんて一

「つもありませんよ」

「愛してます愛してます愛してます。日中は無能共のせいで責務があるため一緒には居られません、その分夜はいっぱい愛し合いますよね。ああ、もちろん私達の時間を奪う子供なんて作らせませんよ。そういう魔法もありますし。…ああ、世継ぎは適当に誰かに産ませますから大丈夫ですよ。ああ、悲しまないでくださいね、子種を提供するだけで、私が愛するのはメアだけですから」

「…ああ、メア。有り得ないとは思いますが、——逃げようなんて思わないで下さいね」

にいいいいいつ、と狂気を孕んだ黒真珠の瞳が嗤う。

「…その時は、……私、何をするかわかりませんから」

思考が絶望に染まり、何も考えられなくなる。

ただ、自分にはもう二度と自由が訪れないのだろう、と……

——頬を伝う涙の感触がした。

まどれーぬ。(後書き)

どうでしょうか？

お楽しみいただけたでしょうか？

そういえば、メアちゃんが転生者だった意味があまり表現できませんでしたね……うう。

次、ガンバレ自分！

<何かありましたら、どうぞご報告ください。>
ただ、ソフトにお願いします……

しょーとけーき。(前書き)

今回は、元・苛められっ娘と保険医のお話です。

しょーとけーき。

うつわぁーマジかよありえねえ。

清潔が代名詞の保健室とは思えないあきらかに私物と思われるアレコレに占拠されている保健室を、ズキズキ痛みを訴える左手首を押さえながら見回して思わずひと言。

「汚い……」

「…ほつとけ」

無人だと思っていた保健室のカーテンに包まれたベットあたりから、低いがどこか甘みのある気だるそうな声が飛んでくる。

「…怪我か？」

ギシッとベットを鳴らしカシャッとカーテンをあけて軽く欠伸をし

て涙目になりながら出てきた真っ白い白衣をきた男の人。

その人はわたしを見たたん、一瞬目を見開いて固まっていたがすぐに手首の怪我に気づきわたしを座らせると、左手首を押さえていた右手を優しく剥がして自分の両手で包んだ。

強烈に手首を蝕んでいた痛みを包む温かいソレに思わず鼻の奥がツンとなり茫然と涙が流れ出す。

「…頑張ったな」

いきなり泣き出したわたしを、その人はどこまでも優しく、温かく、癒してくれた。

コレがわたし、佐々木 藍菜^{あいな} と 鬼堂 琥多^{こた}先生との出会い。

* * *

「琥多センサー茶葉がもうなくなりましたアー」

「…それはお前が毎日用もないのに何杯も茶だけを飲みに来るからだろう」

急須の取っ手を握りながら蓋をあけて、珍しく散らかっている自分の机で書類を書いて仕事をしているセンサーに見せる。

なんということだ。相変わらず私物で埋もれているテーブルにはスペースを確保してすでに茶菓子のスナック菓子とクッキーがスタンバイしているのにつ！

「……………」

「……………」

無言で訴えながら急須の中を見せつけながらセンサーの呆れた視線を受け止める。

「……………」（おゝ茶っ！おゝ茶っっ！ぷりーず、みいー！！）

「……………」はあ。」

やがて琥多センサーは深いため息をつくと机の中から緑色の箱をゴソゴソ探し当て、ほら、と投げてくる。

「ふわお！　おお緑茶だぁーっ、しかも高級だぁーっ」

深緑の箱をパカッと両手で丁寧に開き目を輝かせて並べられた包装された緑茶粉末を宝石を見るかのように眺める藍菜。

「はあ……………お前、今年受験生だろう。大丈夫なのか？」

意気揚々とお茶の準備をしだす藍菜にまたもや呆れたようにため息をつく保険医。

そんな男の質問に、手を止め拗ねたように振り替える女子生徒。

「…お前じゃないもん」

「ああ、悪かった。…藍菜」

あまり表情にはでなかったが、反省している様子の琥多に、すぐ上機嫌になり再び急須に緑茶の元を入れ始める藍菜。

「…それで？」

「んー？ 別に進路は問題ないよ。大学の推薦貰ったもん」

「そうか。…良かったな」

「ふふつ、意地悪だよねセンサーって意外と。だって知ってるはずだもん、理事長代理だし」

「…今はただの保険医だ。それに…理事長代理でも知らなかったことはある」

アイスブルーの瞳を痛々しげに歪め、暗く重々しい闇を含ませ俯く白衣を着た麗しい男性。

普段眠たげにただダラダラと穏やかに過ごしている姿とは似つかないくらいに、それは悲痛なオーラに包まれている。

もう気にしなくていいのに。

だって、誰にも相談しなかったのはわたしだから。

アイツらも影でコソコソやっていたから、先生たちが気づけるわけがないし。

痛くて、苦しくて、泣き叫びたくても、意地張って一人で溜め込んでいたわたしが悪かったから。

たとえば。

教科書がビリビリに切り裂かれて潰れたアリの死骸まみれになっ
いても。

お母さんが朝弱いのにも関わらずお父さんと協力して目覚まし6つ使
ってまで頑張って早起きして作ってくれたお弁当を目の前で蹴り飛
ばされて足で笑いながら「汚い、汚い」って踏み潰されて茫然とし
ていたときに泥水かけられても。

まるで都合のいい玩具のように遊ばれて嘲られて傷つけられても。

どんな目にあっても負けたくなかったから。

でも、現実はその綺麗なことを貫き通せるほど甘くはなくて。

親友だと思えるような仲だった美沙ちゃん。

クラスで無視されたり話しかけてこなくなっても、気の弱い子だったから自分もイジメられるのが怖くてわたしと離れるしかなかったんだろうなあ…とか、

むしろ美沙ちゃんまでわたしのせいでイジメられるよりは、離れてくれてよかったなあ…なんて、

強引に自分で納得して大切にしていた、大事な大事な存在だったのに。

イジメの中心だと思っていた神野たちに屋上に連れて行かれて。

扉が開いた瞬間ギャハギャハ笑っている神野の仲間の中心に座っている美沙ちゃん見つけて。

「コイツ俺らの仲間だぜえ？ しかもお前をターゲットに決めたのもコイツだし！」って、ニマニマ笑う神野に教えられて。

そんな美沙ちゃんはショックで呆然とするわたしに近づいて「それだから出て行ってジャマ」って言って髪の毛掴んで、屋上から追い出して。

「なんで？」って馬鹿みたいに繰り返すわたしを冷たい目で見てきて「あんたなんかゴミでしょ」って、汚物を見るかのように階段の

上から突き飛ばされて。

一応、良いとこのお子さんが通うような私立校でそれなりに規則もきつかったから、バレるとやばいから今まで体を傷つけられたことはなかったのに、流石に階段の上から落とされて無傷ではいれなくて。

細かい擦り傷と全身痛めつけられたかのように痛む体をなんとか立たせて、捻った手首を押さえながら初めて、それ以上にボロボロに碎けて壊れた心を引きずりながら保健室に行つて。

優しくて温かい琥多センサー……あなたに出会えた。

堰を切ったように泣き出すボロボロのわたしを救ってくれたあなた。

事情を聞いて血相を変えて先生たちに指示を飛ばして、神野たちを退学にしたりして、たった一日でイジメを一掃してくれて。

今のクラスじゃあ居心地が悪いだろうからと、学年一仲の良いクラスに席を移してくれて。

それでも人間不信になっていたわたしを昼休みや放課後呼び出してボロボロだった心を少しずつ少しずつ癒してくれて。

そして、いつしかそんな琥多センサーに恋心を抱いて苦しむわたしを、受け入れて「俺も好きだ」と抱き締めて温かい腕で包んでくれ

た。

まあ、いろいろ約束事があるから公でラブラブいちゃいちゃはできない事は残念だし、琥多センサーもてるから、何時まで続くかわからないけど。

それでも、今の時間とこの気持ちを大切にしようって、今を幸せに生きていられる。

「ふふっ、でもそのおかげでセンサーのはにーになれたもん。ラッキーだよ」

お湯を注いだ急須を置いて、座っている琥多センサーに後ろからぎゅっと抱きつく。

「馬鹿、あんな出会いじゃなくても俺はお前を見つけていたし、好きになっていただろうな。…それと……まだ抱きつくな」

「えー、いやぁー？」

「…はあ。まだ学校だし、まだ俺は先生だ」

「んー……はやく、らぶらぶしたぁーい」

「…門の所に行け。そろそろ榊が迎えに来ているはずだ。先に俺の家で待っていなさい」

「えー……」

ぎゅうぎゅうとさつきよりも深く抱きつきながら琥多センサーの首元に顔を埋めて、口を尖らせる。

センサーの艶のある天然の暗めの茶髪からはフワリと甘みのある柑橘系のシャンプーの香りがした。

琥多センサーは困ったようにそんな拗ね気味のわたしの頭を優しく2、3回撫でて「ほら…藍菜」って促す。

「ううー…お菓子はー？ お茶はー？」

「菓子は俺の家にもいっぱいある。…ココにある茶と菓子は俺がちゃんと片付ける」

「……むっ」

「ほら…なるべく早く仕事を終わらせる。藍菜の両親にはもう許可を得てる。家で必要なモノは柵に言えばすぐに出てくるのは知っているだろう？」

「…わかりましたあゝ……今日は後でいっっぱい甘えてやるもん」

名残惜しげに琥多センサーから離れると置いてあったカバンを持って出口に向かう。

いまだに両腕にはセンサーの体温が残っている。

そんな藍菜を微笑ましげに優しく見つめる琥多。

「……じゃあ、…お仕事頑張ってね」

「ああ。…後でいっぱい可愛がってやる」

「ふきゃあ！ はれんちデスうゝ！」

両手を頬に当てて顔をあかくさせて、バタバタと廊下にでて一目散に門へ走る藍菜。

予想以上の反応にクツクツと喉を震わせて笑うと、開けっ放しのドアを閉めに立ち上がる。

「……ん？」

閉めてしばらく休憩にするか、と急須をとりに行こうとしたとき携帯が着信音を鳴らした。

そして、表示画面に表示された名前を見ると、スッと今までの温かい雰囲気からは想像できないような冷たい絶対零度の威圧感を漂わせ、ゆったりとした動きで携帯を開き耳元にあてる。

「……なんだ」

「鬼堂様。…美沙様が貴方に合わせると騒いでおられますが」

「…まだ捨ててなかったのか」

不愉快げに冷たいアイスブルーの目を細める。

「ええ。それで、っ?!」

「…どうした」

「つつ琥多あ！私よつ美沙よ、何で私まで退学にす……」

「……」

「っ申し訳ありません！ 噛み付いてくとは思わず……」

「良い。許す。……はやくソイツを処分しろ。…不愉快だ」

ブツツと携帯をきってポケットにしまう。

藍菜が置いていった菓子の中の椅子に腰掛け足を組んで息を吐く。

俺に執着するように、俺しか見れなくなるように、幾つも畏を仕掛けて重ねて身にも心にも知らしめて。

やっと手に入れたただ一つの何よりも大事な俺のモノ。

買った本人の口には一つも入ることがなかったクッキーの群れの中からアーモンドが埋め込まれたチョコクッキーをつまみ、優雅な動作で口に運ぶ。

そして、この保健室の主であり、

学園の真の絶対支配者は、

クッキーで汚れた指をチロリと舌で舐めながら、

まるで獲物を仕留めて貪り食った猛獣のような満足顔で、

ニヤリ、と口角をあげて嗤った。

「もう……逃げられないだろう?」

「もっとも……そんな気でさえ起きないだろうが」

「…お前は俺のモノだ」

「そうだろう?………藍菜」

愛された少女は知らない。

全てが仕組まれていたことに。

それでも少女は無知のまま。

なぜならそれさえ仕組まれているから。

これからも少女は真実を知ることはない。

なぜなら知らせる人がいないから。

そして少女は愛する男とく幸せに生きる。

しょーとけーき。(後書き)

いやあゝ、このむつつりヤンデレめ…っ！
藍菜ちゃん…頑張ったね(号泣)

この前初めてご感想いただきましたっ
嬉しすぎて一階と二階の階段を暫く上り下りを繰り返すという奇行
をしてしまいました・・・

ていれみす。

『……続いて1月6日現在、未だに行方不明中である武田 舞歌^{まいか}さんのニュースです』

都内屈指の高級マンションの最上階。

都内を一望できる巨大な窓ガラスの近くに設置された豪華なキングサイズに寝転びながら、これまた大きな液晶テレビを眺める真っ白いワンピース姿の女。

その足首には、現代日本には似つかわしくない銀色の鎖が巻き付き、彼女の行動を制御していた。

鎖はベットの頑丈な柱に複雑に絡ませてあり、大小様々な幾つもの南京錠で完全に封じられていた。

—— まっさか、生きてるうちに全国ネットでニュースに出れるなんて思ってもなかったわ。

真っ白いフカフカのベッドの上、うつ伏せで片肘をついて頭を支え

ながら、ぼんやりとそんなコトを考える。

『武田 舞歌さんは12月24日、勤め先である研究所ビルから出社した後、行方が不明になり、今現在その足取りは掴めていません』

—— 出社した後、上司のく佐久間 綾緋あやひさんに、真っ黒いベンツ
だかフェラーリだか知らないが明らかにブランド物の高級車に拉致されて、鎖付きで監禁されてるんですよ

画面に映る、キビキビと引き締まった表情のアナウンサーに、何となく心の中で真実を教えてやる。

無駄なことだと分かっているが、暇人にそんなことは無関係だ。

『警察の調べでは、武田 舞歌さんの自宅に彼女の無数の写真が入った封筒が幾つも届けられていることが分かり、そのことから、執拗なストーカーが関与している可能性が大きいとのことです』

—— …… うわぁーマジっすか。初耳なんですけど…

「大体こんな平凡女をストーカーするなんて、何処の変人だよ」

あまりに的外れな見解に思わず口に出して呆れてしまう。

無駄なことだとすぐに気づくが、暇人にぞ、

「ここの変人かしら？」

寝転がっていた自分の耳元に吐息混じりに囁く綾緋の掠れた声に、身体がゾクリと小さく震えた。

「…何時の間に」

「ふふふ、マカちゃんがこのニユースを可愛い顔で見出したときからよ」

最初からじゃねえーか。

ちなみにマカちゃんというのはわたしのことだ。

何故か舞歌ちゃん↓マイカちゃん↓マカちゃんこの人が勝手に脳内変化したらしい。入社したちよつとあとからこう呼ばれるようになっていた。苗字で呼べと意思表示をしていたのが悪かったんだっ
たらうか。

うつ伏せの自分に覆いかぶさる上司を見上げる。

雪のように白い肌に、花もそこらへんの女共も恥らう麗しき美人顔。ほっそりとした長身の体軀に、軽くうねった柔らかかそうな肩ほどまでの焦げ茶の髪。

言葉遣いもさることながら、ぶつちゃけ超・美人なお姉様にしか見

えないこの人は、わたしの働く研究機関の研究長であり、上司であり、立派な成人男性である。

見る者を暫くはポカンと腑の抜けた無能にさせてしまうくらい美人なこの人を、務めて3年は経つが、これっぽっちも男だとは信じられなかった。

いや、女らしいのは名前と言葉遣いと容姿だけだ。

服装は大抵お洒落な男物で、タイトなブラックデニムにゆったりとした白にところどころ細工された品の良いシャツに身を包み、その上から白衣を着て怪しい色した液体を真剣な、むしろどこか据わった目で生み出していた。

空調設備が整っている研究室では年中無休で薄手が多い。

だから、確かに男らしく胸がペシャンコなのは何度も盗み見て確認していた。……が！それでも男らしさとは無縁のこの顔で『ワア、オトコナンダナア』なんて思えるはずが無いだろうがあっ！！

まあ、今ではその真実を監禁生活スタートとともにこの身に刷り込まされたのだが。

……っあんな立派なもの捻じ込まれたら信じるしかないよね……！

あの壮絶な記憶を思い出し、遠い目になる。

そんな状況の舞歌を転がし仰向けにさせ、腕に閉じ込めると、綾緋はその白い首筋に顔を埋め、何かを確かめるように舞歌のほんのり甘い香りを堪能する。

「ふふつ、今日も良い子でお留守番できたのね」

「ええ。そりゃまあ、後が怖いですし」

大体、こんなに嚴重に鎖で繋いでおいて、留守も何も逃げれるわけないだろう。だが、わたしが逃走に全力を尽さない理由は他にもある。

この豪華で、いたせりつくせりな優美な生活も最初は悪くなかったが、流石にストレスや退屈が溜まってきたし飽きた。それに、これ以上日本中で嫌な方向でフルネームを公開されるのも、自宅を土足で踏み込まれるのも勘弁したい。

警察に保護してもらって、この強姦魔を逮捕してもらって、さっさと日常に戻りたい。

…が、何の因果かこの佐久間研究長はそんな不祥事を揉み消す事くらい簡単なボンボンらしい。

そりゃ、こんな一等地に自宅ではない部屋を買えるほどだ。ソレほどの権力があるなんて、これは自分が不運なのか上司が良運なのか。…おそらく両方だろうな。

さらに、何故かこの極上な美形はわたしを非常に気に入っているらしい。『アイシテル』なんて言葉を囁く程度には。

前に駄目元で遠まわしに帰してほしい峰を伝えたら、三日間狂いそ

うになるほど喘がされ、強烈な快感地獄に叩き落された。あのときの血走った上司の瞳と初めて目の当たりにしたこの人の怒気は一生忘れられないだろう。

とどのつまり…、

「はい、マカちゃん。ご褒美上げるわ」

そういった綾緋が舞歌に噛み付くように深く口付け、舌を絡ませる。

うぎゃあー息できません研究長っ！

あとわたしの唾液を美味しそうに呑み込まないでー。

ひいおっ！ わざわざ奪って吸い込むのも駄目だって！

「ぶはっ！…研究長。酸素が足りなくて死にそうで、」

「…マカちゃん、ちゃんと教えたでしょう？ 私を呼ぶときは綾緋って。あ・や・ひ、よ」

「いえいえいえ。幾らなんでも年上ましては上司を呼び捨てな、」

「じゃあ命令ね。上司め・い・れ・い」

「…はっはっはー！ そういえばわたし現在行方不明中で会社もある意味休暇中なんですよねー！ だから社会の常識は受付却下といえますか。そんな感じです」

「うふふ。聞き分けない子にはこうしちゃおうかしら？ えいつ」

「ひぎゃああ！ やややややっぱりなんでもないです綾緋研究ちよ、」

「あら？ マカちゃんは今私の部下じゃないのよねえ。何故役職名

で呼ぶのかしら？」

「いいあつ！ ちよ、まつ……胸を掴むなああああ、あ、ごめんなさいごめんなさい」

「ふふふふ。それじゃあやり直し。……次はキチンとできるわよね……？ マカちゃん？」

——とどのつまり、現時点では何も出来ることはないのだ。

まあ、いくら精巧な人形の様な人間離れした研究長とはいえ『飽き』という本能はDNAにしっかりと刻まれているだろう。

それまで何とかこの人に『勘違い』しないようにしよう。

『アイシテル』なんて、戯言に決まっているのだから。

ふるーっぱふえ。
(前書き)

お久しぶりです、黒淵です(^ - ^) ;
やっとこさ新作を産み出すことができました。どうか皆様のお気に
召しますように。

ふるーつばふえ。

『イザナギ』

峰岸 翔が総長を務める**県？1の不良グループである。

総長、副総長に三人の幹部全員がこの神崎学園に通学し、その他のチームのメンバーもこの神崎学園に籍を置いているという。

巨大なグループだが、誰一人として長である峰岸 翔への絶対的な忠誠が揺らぐことが無いらしい。

そして、この『イザナギ』はそこらへんのアイドルグループよりも神崎学園の女子達に好かれて騒がれている存在である。それこそ、熱狂的なほどに。

その理由は簡単だ。

確かに微妙な不良も居るが、そんなことを無に返してしまうほどの美形が揃っているからだ。

それも、総長、副総長、幹部は勿論のこと、実力主義である『イザナギ』の上層部に。

まったく、昔から顔が良い、強い男などステータスが良い男はモテルらしいが一部ではオンナ子供でも容赦はしないと囁かれるほど非道な一面がある彼らをきやあきやあ騒いで褒め称えられる神経がわたしは信じられない。

まあ、わたしには関係ないんだけどね。

…なあーんて、
思ってた頃に戻りたい。

場所は屋上。時は放課後。とある日の帰り時にわたしは男子高校生に屋上に呼び出されていた。

しかも下駄箱に封筒というベタかつちよつと古風な方法で。冗談だとは思いつつも、本当に相手は本気で待っていたら…と考えに考えぬいたあげく、その場合の報復を避けたいがために一応念のためと書いてあった通りに屋上に行こうと結論を出してしまったわたし。

98%はバツゲーム的な何かだと思っていたのだが、屋上の入り口を開けてびっくり見てびっくりした。なぜなら、そこには風にたなびく黒髪の…

不良がいたからだ。
しかも我が高校・神崎学園の不良グループ『イザナギ』の総長^{トシ}である、

峰岸 翔その人が。

びっくりした。びつつっくりした。当たり前だろう。ここに来るとしたらバツゲームに負けてしまったそこいらの適当な男子が、不機嫌な表情で待っているとかばかり思っていたのに、滅多にお目にかかれないような美男子が代わりに佇んでいたら。

当然のごとくドアノブを掴んだまま扉四分之一開けの間抜けなポーズで固まってしまった。

「おい」……ほえ？

何だろう今すぐく色気むんむんの低音ボイスが聞こえてきたようなというかこの声無駄にエロくないか？なにを食べたらこんな素敵ボイスが、

「おい。…さつさと入れ。何時までそうしてる気だ」
「…え？…え”っ?!”」

思考の海に溺れていたら、いつの間にか眉間に皺を寄せた端整とい

言葉でさえ物足りないような美顔が目の前に居た。そしてそのまま手首を掴まれ、グイッと強い力でドア付近から引き離されるように屋上に連れ出される。

えっ？てか痛い！手首痛いっ！！

男らしい大きな角ばった手で、ギリギリと力を込められ手首を圧迫される。痛みに顔を歪めるが不良様はお構いなしにグイグイと歩を進める。

一体全体どうということなんだろうか？

もしやこの神崎学園一の恐怖の対象である不良中の不良がバツゲームの被害者なのだろうか？

…すげえな『イザナギ』。総長でもお構いなしに負かしてバツゲームをさせられるんだ。確かに通り名の一つが『歩く爆弾愉快犯』という噂どおりの副総長ならば、いとも簡単に笑いながら行えそうだが。

推定190cmと160cmの足のコンパスの差と相変らずの手首の圧迫に苦しめられながら、そんなことを考えているうちに、屋上の中心部についた。

ピタリと足を止め、わたしの方をゆっくり振り向く黒髪美人のお不良様。

そして、何が何だかまったく状況を理解してないわたしに驚愕の一言を言い放った。

しかも鋭い殺気と睨みと手首の激痛をオマケにして。

「柴田律。……お前が好きだ」
「……………は？」

ひゅーっとわたしの心情を表すかのように生暖かい風が吹きぬけ、
髪を揺らす。

黙る私に平行してどんどん鋭くなる彼の目つき。

明らかに不機嫌なご様子だがこれはあれか？

ウソ告とはいえこんなブスが相手だとは思わなかったZ E みたい
な感じなのだろうか？

そうだとすると、…一ついいか？

わたしもこのバツゲームの被害者だぞっ！……！
ってひぎゃあああっ！ギリギリと、手首が、…っ

「…あ、あのあのっ」
「……………返事は？」

なんてこった話つながらないっ！
というか、ウソ告の返事の正解ってなんだ？！

「…おい。聞いているのか？」
「っい、…」

いった…っ！！！！
これ絶対あざになるって！！
涙目になるわたし。ますます細く釣りあがる不良様の瞳。
そして感覚さえ抜けた麻痺したような血の気のない右手首。

そんな中、無情にもドス黒い殺気だのオーラだのを織り交ぜた恐怖
以外の何者でもない無言の圧力と些かトーンの落とした低い声を遠
慮なくぶつけて来る目の前の男子。

その異様な雰囲気は、まるで、わたしをやみに、『誘^{こいね}つ』よ
う、で、…？

「もう一度言う。…お前が好きだ。俺と付き合え。…勿論付き合っ
よ…なア」？
「……………はい。」

思わず了承の返事をしてしまったわたしは一切悪くないはずだ。

…さて、回想の途中に何故か両目が湿ってきたが、つまりその今日
でのショックキングな……事件？いや恐喝？地獄？から三日たった。
へろーオアこんにちわ。柴田律です。普通の女子高生です。

「おい。…帰るぞ律」

…うそです。

なんてこった。開始十秒でなんかいろいろへし折られたぞ。

その根源は教室のドアのところにいかにもダルそうにたっている。
真っ黒くて冷たいオーラを撒き散らしながら。

はははなんだきみいゝもつとフランクに生きようじゃないかふはは
はドア側の席の子が怖がって…

い な か っ た ！

むしろあれときめいていらっしやるっ？！

ホッペが真っ赤ですよ目が潤んでますよ胸を押さえているっ？！

少女マンガか！

「……早くしろ」

「っあい!!」

しまった。一瞬の間に鋭く飛んできた、あまりの恐怖に舌を嚙んだ。
「っあい!!」ってなんだ「っあい!!」って。

ゆつくりと、ガンを飛ばしながら歩く男に3歩下がってついていく。
廊下を通るだけなのに何故にこんなにも恐怖に侵されているのだろうか。

さらにいうならば、何故にこんなにも人々にチラチラ見られないといけないのだろうか。

ん？ 何故チラ見なんだ？って？ ははは、そんなのこの魔王が怖いからに決まっているだろう。

んん？ そんなに怖いなら見なきゃいいじゃん？だって？ ははは、そんなの学校一の有名人とこんなただの平凡女子高生と一緒に歩いていたら、恐怖よりも好奇心が勝つに決まっているだろう。ははははは、つまりは怖いもの見たさというやつですね。ははははははは。

「……」
「……」
「……」
「……」

無言が痛い。

女子からの嫉妬の視線も痛い。そして怖い。

ささってます、ぐさぐさと。

いや、気持ちはわかります。一応は。

自分の好きな人がこんな地味女をとったなんてプライドが許せませんよね。「キーっ！ 私のほうが可愛いのに！！」みたいな。すいません、「キーっ！」の部分で噛み締めるハンカチあげるんでその物騒極まりない包丁の先みたいな殺人才ーラは分散させてください。ちょー怖いです。

――ぱ、りんっ……！！

「ひいっ！！」

「きゃああ！」

硝子の破片があたりに飛び散る。

運悪くぶち壊された窓ガラスの下にいた人々がいるようで、遠くからも悲鳴が聞こえた。

あたりに緊張が走り、呼吸の音さえも噛み殺しているかのような静寂が訪れる。

わたしはというと、この不良様から遠慮なく滲み出る殺気に恐怖で体を硬直させていた。

——怖い、こわいこわいこわい……！

窓ガラスを叩き割った張本人はゆらりと伏せていた顔をあげる。その拳にはうつすらと血が滲んでいた。

「……うるせえ、失せろ」

「……つい……！」

どたばたと周りに居た野次馬が消えていく。声にならない引きつった悲鳴を呑み込んで。

その様子にコンクリートみたいにガチガチに固まった足を動かそうと試みる。……が、震えるばかりの両足は役に立たない。ああいやだいやだわたしもはやくにげたいこわいこわいこわ、い、よ、……

「……律。どうした？」

「……っ」

いつの間にか目の前にいた恐怖の源に、歯がカチカチと音を立てる。わたしだって怖いものは怖い。

それなのに目の前の綺麗な顔はゆったりとさらに近づき、さらりと右手でわたしの顔に触れて無理やり目と目を合わせてくる。

他人でいる内はいい。それもまったくの赤の他人の内は。たまに聞こえてくる彼らの非道だったり、夢物語のような現実性をこれっぽちも帯びてないような噂や伝説を聞いている状態が一番良い。……いや、良かった。

それなのに。

今まで無縁だった【暴力】を……彼らにとつたら暴力のぼの字です

自らが穴をあけた窓を全開にして、

その縁にわたしを座らせた。

逃げられないように。

体で抑えつけると同時に、微妙な力で腰を筋肉質な腕で支えながら。

「怖いこわいこわいこわい！！！！」

ここは四階。

下におちたら、…しぬ。しんじやう！

「ひっ！やだあー！！」

死への恐怖のほうに勝利し、男の首にしがみつく。

「あ、あああ…やあ…やああ」

口から言葉とはいえないものが無意識にでてくる。

このまま女子高生の脆弱な腕の力では持たないのではないのか。という不安。

視界の隅にある外の景色と、制服のブレザー同士で滑りそうになる両腕を必死に何回もしがみつき直すわたしをにやりと見つめている男への恐怖。

「怖いか？恐いか？」

何が楽しいんだ！と怒鳴り散らす勇氣も余裕もない。そんな冷や汗まみれだらうわたしを愉しげに、瞳を細めながら至近距離で見てくる男。

「ほらもつと…話せ…」

「ひ、い！…いやああああ！！」

ふつと微弱ながらも腰を支えていた力がふつと消える。さらに上体をわざと窓側に寄せてくる男。さらに斜めるわたしの上体。沸き上がる恐怖。視界は最早、滲んで溢れる雫。流れおちていく。

「もつと縋れ。もつと声をだせ。もつと俺を求めろ」

「ひぐつ、…うあ」

「俺という、…峰岸 翔という存在をその体で。…ちゃんと覚えておけ。忘れないように恐怖で雁字搦めにして。忘れるなよ？お前が誰のモノになったのかを。…なあ？律」

「いあつ…な、んでっ」

「あ？」

「なん、でっ…わたしな、の、？」

ひいひいとみつともなく喘ぎながら、一番気になっていたことを口にすることができた。

涙がとうとう首筋を辿り、胸の谷間にまで滑っていく感触が気持ち悪い。

「さあな」

必死のわたしの質問を興味無さげに答えると、べろりとわたしの頬

を舐めあげた。

引き攣った悲鳴が喉を震わせる。

「ただ…お前が欲しい。俺のモノだ、と思ったからだ。ああ…だがこんなにも、この俺が愛おしいと思えるなんてな。…予想以上だ。これは手放せそうにないな…この俺が、性欲処理にしか使えないと、いつもこいつもただの屑だと思っていた女に嵌まるなんてなあ」

同一人物とは思えないくらい、酔ったようにべらべら喋る男。

縋り付く首が嗤い声と共に震える。

「だから、…最後まで責任とれよ？律。

逃げられると思うな。この関係が終わるなんて無駄な考えは持つな」

最後の冷たい絶対零度な言葉と共に、がっとな顔を掴まれ無理矢理虚ろになっていた瞳を合わせられる。

視界に写った支配者の眼光に、極限状態だった意識が遠退き、カタカタと小刻みに震えていた両腕から力が抜けた。

腰に回された、さっきとは違う力強い腕に、目尻に落とされた柔らかい感触を感じてわたしは完全に意識を手放した。

これがどうか夢であってほしいと願って。

ふるーっぱふえ。（後書き）

鬼畜の所行おおおお！！！！

申し訳ないです。こんな作品で（- -;）

最初はちよつとコメディー風味のはずだったのに…申し訳ないです
（T T）

さらに中途半端で終わってしまった…！

いやそれは仕方なかったんだけど！このまま突き進むともつと酷い
展開になってド鬼畜お前だれだよ的な話しになってしまつという不
可抗力なんっだー！！

さて。言い訳がましくて申し訳な（殴

すふね。
(前書き)

長いです。

登場人物

錦織 幸

相馬ルイ

田中

すふれ。

とある高校の体育館裏。

そこで私は何故か両手を掴まれ、壁に押し付けられていた。

押しつけているのは隣のクラスの男子生徒。名前は確か…田中クン？ だつたっけ？

ミーハーな友達がきやあきやあ騒いでた例の『A組のイケメン』らしい。

そんな田中クンは私が逃げないように私の両手を塞ぎ、自らの体を密着させている。

つまり…

「……なあ。オレと付き合えよ。…気が済むまで可愛がつてやるぜ

？」

「……」

今現在、私は田中クンに攻められている。

というか、お互いの息が触れ合うほど顔を近づけるのはやめてほしい。

高校生とは思えないような色気を漂わせてニヤリと笑う端正な顔から目を背けるように、おもわず下を向いて顔を歪める。

耳元でクツリと笑う声が聞こえた。多分そんな私の様子に気がついてないのだろう。

おそらく田中クンは…。

思い立った理由にうんざりする。

まったく。…《コノ男》もか。

「本当に可愛いな…。お前の全てがオレの血を騒がせるんだ」

「……」

「なあ。…もつとイイ表情を見せてくれ」

「……」

「骨の髄まで、オレに溺れろ」

「……」

「ああほんと…オレしか見えないように、…めちゃくちゃにしてやりたくなるよ」

「……」

そつと伏せていた顔をあげる。

『怯え』の表情を滲ませて。

そこにあるのは、瞳に仄かに宿った欲望の色に嗜虐的な…サディスチックな笑み。

今もチラリとその瞳を見ただけなのに、目の前の体はかすかに震えた。

「くくつ…そんな目で見るな。ぞくぞくするだろ？」

「……」

――ドSド鬼畜美形限定超モテ体質。

あまりの私の不幸な恋愛歴に親友が溜息をつきながらつけた私の体質。

もう全然嬉しくない。

その名の通り、何故かサドだの鬼畜だのという偏った性癖の男女問わず年齢問わず昔からアプローチされるのだ。

しかも決まって美形ぞろい。

三日前、町ですれちがったキラキラの爽やかオーラを振り撒きながら歩いていたイケメンなお兄さんが、にい…と泣く子も黙るようなどこかイツちゃってる笑みを浮かべてありえないスピードで追いかけてきたときは、大絶叫しながら回りに助けを求めてしまった。

ビックリしたが慣れすぎて（1歳から今までで誘拐・強姦未遂・ストーカーその他もろ計300件近く。親は最初、心労でハゲそう・吐きそう・死にそうの三拍子だったと遠い目をして呟いていた）怖くもない。

勿論その次々と起こる事件の加害者が全員見目麗しい美形だとしても嬉しくとも何とも無い。

私はマゾではない！！

被虐嗜好はない！！！！

同性に恋愛興味もない！！！！

なのに…

なんで手錠を持って追いかけてくるっ？！

なんで一週間に一度は鞭だの紐だの明らかにSM用のアダルトグッズが家に届くっ？！！

なんで学校一のマドンナからハアハア言われながら押し倒されるんだアあああああ？！！！！

だが何とか貞操守って18年。

ギリギリどころか数ミリ…いや数センチは危ないところに足を突っ込んでしまったがそれでも！

それでも！！（二回目）

ド鬼畜族に処女まで奪われてたまるかアあ！

これ以上振り回されてたまるかアああ！

幸せ吸い取られてたまるかアああああ！！

もはや座右の銘にまでなっている三つの言葉を心の中で叫びまくり、顔をあげて押さえつけてくるイケメンをキッと睨む。その鋭い視線に驚いたのか、それとも私の切羽詰まった気迫に驚いたのか、男のさつきまで獰猛だった気配が、きよんとしたように拡散し、目を瞠ってこつちを見つめる。

その様子にちよつとだけ、これからすることを思い罪悪感がひよこりと鼻先を出したが、慌てて押し戻した。いかんいかん。奴等は悪の申し子気を抜くな錦織^{にしきおほぢ}幸いいい！！アンタは名前だけは幸せそうなのにね。名前だけは。…ってまたため息をつかれながら呆れた目で友に見られたいのかアああ？？！ストーカー…いつもいつまでもどこまでも貴女と一緒に…ウフウフ…フラグを立てたいのかアああ？！！

そんなのは…

いくら美形といえど生涯この精神を苛まれてこの身を嬲られて過ごすなんて…

「そんなの嫌に決まってるんだろ、…っがアああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「ぐアッ」

一球入魂の蹴り！！

命中するは男の大事な急所！！

「…っ…っ…っ」

無言で体をピクピク小刻みに震わせ、地を這う田中クン。
その顔色はもはや真っ青。

やっ た た た！私はやっ た た たよ！！正義は勝つんだジャスティス！
ジャスティス！

「ハイ、そこまで」

「っ？！」

「…っ…っ」

小躍りしてたらいきなり後ろからにゅうつとでてきた両腕にガッツ
リホールドされた。

田中クンは相変わらず目の前に伏せている。

え、じゃあこれは誰だ？ってうわあ！後ろにピカピカの美形いい
い！

気を抜けば生命の危機に陥れてくる『美形』に激しく反応する。
てかー！てかー！と鳴り響く頭の中の警戒音。

ソレと共にばたばたと足と腕を総動員させて暴れまくる。

とりあえずこの格好はやばい！！ちょ、腰に腕を回すな唇らしきも
のを首筋にくつつけるな！というか…

「ドチラ様っ？！」

「んフフ。貴方に恋焦がれてやまない一人の男デス」

げえ。やっぱりコイツも危険！！

明らかに天然モノの柔らかかそうな金髪に碧眼。

それだけさえ充分目を引くの、さらにキラキラに整った麗しい御顔…

今まで出会った美形の中でも群を抜く端整さ…やばくね?! 今日やばくね?!!

平凡顔の私が美形の評価を下せるようになってしまったという無駄なスキルに嘆きたくなるが、それ以前にこの不幸体質が今日だけで敵を二人も引き寄せたことに泣きたくなる。

「ひいひいっ」

おぞましが背中を駆け上がりまた下っていった。その速さコンマ一秒わけわからん。

アホな思考をよそに今までの経験で対応の仕方が完備している体はジタバタと相変わらず暴れてくれる。

「こらこら。ダイジョーブですから、おとなしくしなさい? ……ダイジョーブですから」

駄々っ子に言い聞かせるように優しく耳元で囁かれる……しかし!最後の部分で何故にトーンが落ちたんだ?! 「ダイジョーブですから」…絶対大丈夫じゃない片言怖いいい

なお一層ジタバタと力を込めて暴れる。その顔面はそこで這い蹲る田中氏よりも青いだろ。オマケに冷や汗が止まらない。

何度も危ない橋を渡ってきたというのに、慣れすぎて怖いことなんてもうないと思っていたのに、心の芯から冷えて逃げたい!! と強く思うのはきつと、…

「んふ。仕方ないですネエ。…困った子だ。まったく」

トンッと首筋に衝撃が走った。

途端に黒に侵食される視界に動かなくなる体。
思考でさえ鈍くなる。

——強く思うのはきつと、……

この男の本気と、

チラリと見えた碧い碧い綺麗な瞳に

みたことのないくらい、

濃くて重いような昏いナニかが、

宿っていたからだろうか・・・？

「……ん……？」
体が変に重い。

瞼を開けるとそこは一般庶民が見たことも無いくらい豪華なお部屋でした。…うん。私の貧相なボキヤブラリーを許して。
そして私は映画に出てくるようなでっかい天蓋つきベットのの上にいた。これが噂のキングサイズか？

「んフフ。おはようございマス、気分はいかがですか？」

「……ここにいくらか見覚えがあつたなら今より少しはましだろうな」

ワイン片手に奥のほうから優雅にやってきた漆黒のスーツ姿の美形を、じとりと瞬きもせずには注意深く観察しながら適当に答える。
ちくしょうマジで何処ですかここはっ？！

大きな窓ガラスから見える日本じゃめったに御目にかかれないような、透き通った蒼い海と日光に照らされ眩く輝く砂浜のコントラストを視界の端でチラチラ見ながら、じわりと湧き上がる気持ち悪いくらいの不安に押し潰されそうになる。

「……ん？あれ…お、はよう…？」

コイツさつき何ていった？確か…「おはようございマス」とか……
私が田中クンに呼び出されてホニャララされたのは、放課後…15
時辺りのはず…

しかしそれでは窓から差し込む明るい光の説明が付かない。

はあ…これはまた大掛かりな。

「…睡眠薬か。ここは何処だ？何県だ？もちろん国内だろうな？」

「……つまらないですネエ」

貼り付けたような美形の笑みがすっと消える。

変わりにできた能面のように表情がない顔。

コトリとワインがベットの脇のテーブルに置かれ、ゆったりと男がベットにさがり近づいてくる。

その余りにも整った顔との距離はわずか3センチほど。

『無』の瞳に合わせて私も『無』の瞳で男の眼に映る自分を見つめる。

ちょっと怖いけど、恐怖は感じない。

だてに今までシャレにならないような犯罪に巻き込まれてきたんだ。対処法など体で覚えている。

しかし…今回は大変そうだな。ココが海外だったらなおさら。その最悪のパターンは考えたくもないが、この部屋を見る限り、この男がかなりの金持ちで…という可能性は捨てきれない。

とりあえず、怯える素振りは絶対に駄目。

相手が興奮してそのままパツクリ喰われるなんて冗談じゃない。

今まで努力を無に返すな錦織 幸…！！

「一番最初に貴方の魅力に気づいたのが、僕だったからよかったのに

…」

「…！」

そのまま唇が塞がれる。

オマケに逃げられないように後頭部を押さえ込まれる。

ぎゃああ。もうすとうーもうす。

ちなみに初キスは1歳。

一番最初に誘拐してきた近所の好青年（大学生）で、警察がその青年の部屋に駆けつけたときに濃厚なベロちゅーをされていたらしい。

両親そろって頭を抱えながら教えてくれた。まあそうだろうな！頭も痛くなるさ！！
ちくしょう！！

ぬめ…っと唇から割り込んではいってくる生暖かい舌。
じわじわと味わうように啞内を一通り舐めたあと、私の舌と絡ませ
てきた。

うわぁ。唾液が…ぐちゃぐちゃするよーうつ
音が卑猥だわぁー

でも、それよりも…

「…ん、ふっ……あ……」

熱を帯びて仄かにあかい頬。

蕩けるように潤んだ碧に垂れた目尻。

口から漏れる甘い吐息。

額から伝う汗が通る、時折コクリと鳴る白い喉。

…この人のほうがエロい。

なんだ遊女も逃げ出すようなこの色気は。

…まあともかく。
ちゃんす！……！

「ん、…ん……はあ……っ！んんっ」
「…………っ」

ぐいつと男の濃いグレーのネクタイをひっぱりさらに自分から深く舌を絡めてやる。

キスなら今までに散々奪われてきた。

余計に目を潤め、私に応える男の舌。

その様子をじっと見つめて私は…

いきなり、

男の舌を

噛んだ。

「んあ…！…っ！」
「…………」

ガリっという音と、男の見開いた目。

口の中で血の味がした。

ばつと体を突きとばす。

赤混じりの透明な液が線をひいてブツリと切れた。

制服の裾で口元を拭う。

男の鼻から上は乱れた金の前髪で隠されて見えないが、薄い唇からは同じく赤混じりの液体が垂れて、ほんのりスーツの胸元あたりを汚した。

「……う、あ……ああ」

「？」

相変わらず男の表情は見えないが、あきらかに高級そうな黒いスーツに身を包まれたスラっとした軀がブルブル小刻みに震えだし、男が何やら吐息混じりに言葉にならない音を紡ぎだす。

怒った？怒ったか？

相手に痛みを与えて喜ぶ性癖のヤツは自分が痛みを与えられると逆に萎えるもの……らしい。…と曖昧に友が言っていた。

上手くいけば、痛い↓萎える↓とりあえず貞操の危機脱出↓脱走↓
帰宅のルートを通ることが出来る。

成功確立は低いが、もはやこの話に賭けるしかない。

さあ？

どうなる？

「……もーいっかい」

え

「もーいつかい…き、もちいいの…して…くだ、サイ…？」

軽く乱れた胸元から見える白い鎖骨

荒く紡がれる艶を帯びた吐息

先程よりも朱に染まった熟れたような頬

そして、
…

輝く前髪の隙間からやっと見えた碧は情欲に濡れている。

その表情は

まさに『恍惚』で…
—

あれ？

＊ ＊ ＊

「申し遅れました。相馬^{そうま} ルイと申しマス。これから生涯よろしく
デス」

「…何をどこからつつこめばいいんだ…」
辺りにガラスの破片を撒き散らしたベット、大きく紅く染まったシーツの上でぎゅうぎゅう私を抱き締めながら、にこにこ疲れを感じさせない天使のような笑顔を浮かべる相馬ルイとやらに、頭が痛くなってきた。

というか…本当に！

まず名乗るのが遅い！遅すぎる！

あと「生涯よろしく」なんて挨拶は無い！！

結果――

喰われました。

そりゃもう骨まで貪る勢いで。

もちろん全力で暴力という名の抵抗はした。

叩いて、蹴って、…脇に置いてあったワインで米神をぶん殴ってみたり。

飛び散るガラスに、辺りに広がるワインの芳醇な薫り。

あきらかに一流ブランドの男のスーツに流れる紅い液体。

さらに、顔をあげた男の米神から滴る、紅じゃない赤。

我ながらなかなかバイオレンスだったと反省する暇もなく、自分の血にさらに興奮した男…相馬ルイとやらの喰われた。

一週間も！

初心者に休憩込み一週間ずっこんばっこんはきつくはないか？！というかアホだろ！！

「ああ、どうされマシタ？具合でも？今すぐ僕の元気をわけて差し上げマ…」

「だまれ！！」

心配気な儚い顔に騙されてはいけない。

現にこんなセリフを吐きながら、その手は内股を撫でていた。

「…ここはどこなんだ？」

「僕が所有する無人島デス」

笑顔のままさらりと言われた。

さらに相馬は続ける。

「ちなみに海外デス。日本は出ました。まあ、もう戻る予定はアリマセンが」

「…」

相馬の手首に思いつきり爪をたてる。

…なぜこの男は頬を染めるのだろうな。

「ああ、心配しないで下サイ。この島に貴方に害する生き物はいません。駆除は完璧デス。それとモチロン、この島に貴方と僕以外の人間もいません。…二人だけデスよ？んフフ」

「…つまり、立派な檻ってわけか。金持ちも暇だな」

「…檻？」

すつと碧の瞳が細くなり、見覚えのある無表情と溢れる威圧感が出てくる。

「そうだろう？こんなことするのはお前が初めてじゃない。訳はわからないが、ただ単に変な執着心からどうこうされるのはいいい加減疲れるのだが。…まあ、他の奴等とはお前は性癖が違うようだがな」

「他の男と…比べるな！！」

「っ！」

突然の怒鳴り声にびっくりした。

ビリビリと鼓膜が揺れている気がした。

がし！つと肩を強い力で掴まれて、ベットに押し付けられる。

「いた…つい」

「変な執着心？そんなもので5年間もかけて貴方を囲む準備をするわけない！！ずっとずっとずっとこの腕に貴方を…サチを！！抱き締めたいと！どれだけ思っていたか！！サチが今日はこの男に女にどうこうされたと聞いてどれほど腹が煮えくり返ったか！！…まあ、一人残らずこの世にはイマセンが。んフフフフ」

肌が赤くなるほど強い力で両肩を掴み、ぐいっと顔を近づけ叫ぶ相馬。

その碧の瞳は瞳孔が開いている。

「え……この世にいない……?」

「ええ。イマセンよ?皆揃って仲良く殺してやりました」

「……」

「ああ、アトですね。…僕はマゾではアリマセンよ?」

「え」

「んфф他の人間にされていたら、嬲り殺してマス」

「貴方だから…サチから与えられるモノならなんだって喜んで受け取りマス。サチからされたというだけで、…僕の体はいやらしく熱くなるんデス……責任とって下さいよ?僕の持ち主として…ネ?」

はあ…っと熱く吐き出された溜息と再び危ない熱のこもった碧。

「んфффф。これからどうしましょうか?海も森も素敵ですよ?この島は。まあ、…貴方がいればどんな枯れ地だって天国デスが」

さらりと髪を撫でられる。

劳わるように、優しく。

「ずっと。僕と一緒に、イマシヨウネ?」

そういった相馬の顔は、…

まさに狂ってるくクレイジー>

すふね。(後書き)

いかがでしょうか？

よろしかったら感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8507p/>

不幸女・すいーつバイキング。シリーズ

2011年10月8日11時09分発行